



日本で暮らすウクライナ人のためのプレイバックシアター

小森亜紀¹⁾、Olesia Kyrylchuk²⁾

1) 劇団プレイバックーズ 2) MAVKY



はじめに 2022年にロシアによるウクライナ侵攻があり、その後も戦争が続いている。2022年から2024年に日本に避難をしてきたウクライナ人は2,700人余りとなっている。プレイバックシアターは世界70か国以上で実践されており、ウクライナもその一国である。Olesia Kyrylchuk氏はウクライナでプレイバックシアターの実践者として活動していたが、2022年の夏に東京へ移動することとなった。彼女から、プレイバックシアターを通じてウクライナ人の支援ができないかと劇団プレイバックーズに相談があり、協働してこのプロジェクトを始めることとなった。

実施の概要

第1回 2022年10月15日

会場: 東京都内
出演: 劇団プレイバックーズ
参加者: ウクライナ11人
日本17人

第2回 2023年2月11日

会場: 横浜市内
出演: 劇団プレイバックーズ
Olesia Kyrylchuk
参加者: ウクライナ24人
日本26人

第3回 2023年8月12日

会場: 横浜市内
出演: 劇団プレイバックーズ
劇団MAVKY
参加者: ウクライナ10人
日本21人

第4回 2024年2月25日

会場: 横浜市内
出演: 劇団プレイバックーズ
劇団MAVKY
参加者: ウクライナ13人
日本22人

劇団プレイバックーズ

1994年から横浜を拠点に30年活動を続ける劇団



劇団MAVKY

日本に住むウクライナ人をメンバーとして2022年にKyrylchuk氏が創設

ストーリー紹介

・「涙もなくなった今」 昨日で、ロシアによるウクライナへの全面侵攻が始まり2年になった。当時、自分が軍に入りウクライナのために戦おうと思っていたが、父は娘である私に対し人生を無駄にしてほしくないと思い、行かせなかった。弟を連れて日本に来て1年になる。安全なはずなのに、安全だとは感じられず、ウクライナにいる家族や友人のことを思い毎日泣きたい気持ちになる。日本に来たばかりのころは実際に泣いていたけれど、その涙すら残っていない。父は今、家族を守るために前線で戦っている。

・「全身の痛み」 10年前から仕事で日本に住み、ウクライナ人のために働いている。侵攻が始まったとき、ウクライナのために何かをしたいと強く考えていた。しかし、そのことを考え始めると、強い頭痛に悩まされるようになった。さらに、ウクライナにいる家族のことを考えると、全身が痛むようになった。仕事で、日本に避難してきたウクライナ人の住まいを探す支援に奔走した。やがて、その人たちの生活が落ち着いてくると、自分の痛みも楽になっていった。

参加したウクライナ人の感想

- ・たくさん泣いたり、少し笑ったり、そういうことが大丈夫だと感じられる温かい雰囲気だった。機会があれば、次回私の話を共有したいと思う。
- ・いろいろな気持ちを感じた。泣いた。カタルシスを得られた。
- ・公演によって複雑な思いを感じることができた。
- ・どこの国の人であっても、気持ちは同じだということがよくわかった。
- ・演劇を通して、文化を学ぶことができうれしく思う。仲間との出会いとコミュニケーションに喜びを感じた。



実施の障壁とその対応

経費

ウクライナの人たちに無料で気軽にプレイバックシアターを楽しんでいただくため、有志の日本人から寄付を集め、公演の必要経費をまかなった。

言語

日本語ーウクライナ語の通訳が必要であった。個人的なつながりを通してボランティアで通訳ができる人材を探した。また通訳がプレイバックシアター自体を知らないため、事前に打ち合わせをしたり、通訳が入ったプレイバックシアター公演の動画を共有するなどして準備をした。

一致

舞台上のパフォーマーと観客との背景が一致していると、舞台上と観客につながりが生まれやすく、良い公演になると言われている。舞台上のプレイバックーズ劇団員と観客席のウクライナ人とはかなりの乖離があった。回を重ねつつ、Kyrylchuk氏、そして彼女が日本で創設した劇団MAVKYのメンバーが舞台上に立つことができるよう計画した。MAVKYのメンバーは皆プレイバックシアターの初心者だったが、合同のリハーサルを経るなどして、安心して一緒に公演ができるよう準備した。

まとめ 2022年からの3年間で実施した、日本で暮らすウクライナ人支援のためのプロジェクトを紹介した。ウクライナ人であるKyrylchuk氏と協働しながら、徐々にウクライナ人のアクターが舞台に立って、より、観客にとって語りやすく、共感を得やすいように工夫した。プレイバックシアターは、困難を経験しながら異国で暮らすウクライナ人に、芸術を通して得られる癒しや人とのつながりを提供する。戦争の真の恐ろしさは個人の体験の中にこそあるが、容易には表出しがたい。プレイバックシアターはそうした経験を語り、共有することを可能にし、対話による理解や傷の回復を促進すると考えられる。また、プレイバックシアターでストーリーを共有することにより、日本人とウクライナ人がストーリーを通してつながる機会となった。